

# 太宰管内志

筑前之七

那珂郡上

三番

和書門		
二九六〇一	二〇二	八二
號	函	冊

和書		
二九六〇一	二〇二	八二
號	冊	架

內閣文庫	
番號	和 29601
冊數	82 ( 35 )
函號	176 44



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





Table with approximately 10 columns and 20 rows of faint, illegible text. The text is arranged in a grid format, typical of a ledger or account book. The characters are very light and difficult to read.

Blank page with faint, illegible markings or bleed-through from the reverse side. The page appears to be a flyleaf or separator page.



太宰管内志

明治十年獻本

筑前之七

筑前人伊藤常足編録

那珂郡

延喜式子筑前國那珂郡あり

万葉集五卷子筑前國那珂郡云云和名抄子筑前國那珂東

西子拾芥抄 那珂ハ奈加也訓ベシ名義イマゴ詳ある

書紀子ハ儼縣マシ郷大津ふとありて那珂ハハ書ササテ中を奈とも云例古き物子是彼見ゆれをシハ中ノ意 子て負セシ子 子て仲哀天皇紀子八年正月壬午幸筑紫

己亥到儼縣類聚國史八十七卷子延暦十二年八月戊辰瀧

送筑前國那賀郡人三宅真繼於本郷莫聽入京以其在京中

屢有濫行也後紀十七卷子天長三年十二月云云太七月七



日慶雲見于筑前國那珂郡賀續後紀三卷子兼和元年正月上  
表云云太宰大貳從四位下藤原朝臣廣敏等奏你慶雲見於  
筑前國那珂郡三代實錄十七卷子新羅賊船筑前國那珂郡  
乃荒津尔到来天云云朝野郡載三卷子管崎宮在西海道筑  
前國那珂郡同書世卷子長治二年八月云云大宋國船壹艘  
到来筑前國那珂郡博多津志賀島前鎮西要略三卷子弘安  
八年太宰豐前守盛氏始号景資居於岩門城募蒙古給戰之功有  
篡嫡之意構兵修城都督府司遣管内之武士征岩門城主致  
死其子被宥焉号豐前守經氏子孫稱平井氏九年蒙古人舟  
師自志賀沖襲来而燒管崎之人家其舟大将名阿谷海賊兵

數百人所殺引退海上などあり和名抄子那珂東西とある  
唱へしなるべし後の物よえ聊もさる趣ハ見え比管崎宮  
の文書子當國那珂郡管崎八幡宮御社領那珂郡西郷百八  
拾町地之事從大内凌雲院殿御代雖為半濟為武運長久子  
孫繁昌所願成就皆令満足号新寄進奉還補者也仍執達如  
件永祿二年三月廿五日筑紫下野守惟判并進管崎八幡宮  
とある此西郷と云事和名抄の比よ分てるまゝありや志  
比ら次子郡大様ハ和名抄子那珂郡曰来曰佐那珂良人海部  
中島三宅山口板曳己上九郷あり和尔雅名慶子筑前國那珂郡荒  
津博多袖湊蓑島志賀磯良崎此内子袖湊ハ名慶子あり志賀磯良崎ハ古ハ糟屋郡内  
ちり故此度那珂郡内子奉元祿日記子那珂郡六十一村高三万四千  
三百六十七石二斗四升九合ありさて此郡西ハ早良  
郡東ハ糟屋郡席田郡御笠郡南ハ山を隔て肥前國北ハ海



を隔て糟屋郡志加島に隣りて、志賀島今ハ那珂郡につけり。東西一里餘、南  
北三里餘あり。中ハ那珂川有て田地ハ旱損の患なく。又福  
岡、城博多、町有て貨財を交易する便よろしく。又海有て運  
送の便もよろしく。處なり。猿樂俗謡又あるふこの大畧は、  
聖武天皇の御代ハ佐野、近世と  
云々。筑前守よて下、京より具しある妻國よて死に  
り。さて此國ハある女を妻と志り。先の妻の生る娘を  
くひてい。此曉よ来て云。此女子を失むと思ひ。海人をか  
らひて云。此曉よ来て云。此女子を失むと思ひ。海人をか  
我とよましくつるが釣衣を盗ておもしつる。あべとい  
へとて。色々の宝をとる。海人曉よ来てありて兼て  
頼こつる如く高らう。云々。娘の父是を聞いてい。は娘  
く怒て行て見る。ハ彼娘ぬれぎぬをかづきて伏り。是ハ娘  
のぬれりぬるひ。ハ娘を殺しける。さて次のと。ハ父の夢  
る。事を知ず。娘を殺しける。さて次のと。ハ父の夢  
ぬ。見えて娘がぬる。ハ娘を殺しける。さて次のと。ハ父の夢  
ぬ。見えて娘がぬる。ハ娘を殺しける。さて次のと。ハ父の夢

つふ。決こそる。名を流すためし。なり。父夢さめて  
娘の罪ある事さとりて。妻をかへして。其身ハ出家して。肥  
前國松浦山よすめり。世ハ松浦上人と云ハ。是なり。それよ  
りして。あるき名。ハ事ぬれぎぬきるとい。ハ傳へありと  
云。事のある。ハ因て。い。つ。の。比。よ。博多聖福寺の西門の側  
ハ濡衣墓と云。物を造り。を又近世其墓を宮崎松  
原。西の橋際博多の東石堂口の川東ようつせり。池中ハ有  
て。大なる石を志し。とせり。是ハ近昔の作物語よて。實の  
事ハハある。す。源氏物語ハ見え。ある。玉葛君の古跡と云。物  
を近世ハ作る。類あり。彼二首の哥のす。ハ聖武天皇の  
比。の。ふ。り。ハあり。す。次ハ袖。湊と云。も。古。哥。ハ袖。湊のさ  
に。ぐ。ふ。ど。あり。て。憲。哥。ハむ。時。の。とり。ふ。し。よ。て。思。川。淡。川。淡。  
瀧。る。ど。の。如。し。實。の。地。名。ハ。あ。り。す。さ。て。那。珂。郡。春。日。村。ハ  
春日神社とてあり。古。社。あり。此。社。ハ。因。て。村。名。を。も。志。り。負  
せ。あり。と。聞。中。社。境。内。廣。し。社。前。ハ。池。あり。て。その。阿。と。り。子  
喬木あり。古。神。領。多。かり。と。云。九。月。九。日。祭。あり。又。此。郡。仲  
村。ハ。荒。人。神。社。と。て。若。戸。郷。十。二。村。の。宗。社。なり。是。住。吉。社。の  
旧。地。ル。し。て。祭。ま。る。神。も。か。の。三。神。なり。神。宮。を。な。ハ。ち。佐。伯  
氏。なり。社。ハ。西。向。ひ。て。近。辺。四。五。村。の。本。居。神。なり。大。祭。九  
月。十。九。日。ハ。お。お。ま。ふ。る。り。又。福。岡。東。橋。口。子。も。水。鏡。天。神。と



てあり。社家傳子管公太宰府へ尤遷の時御船此湊につきて舟よりあつて給ひ。御身の御衰を歎かせ給ふ處。後世社を建て水鏡天神と云。又容見天神とも云。一説子管公御姿を此川よりつさせ給ひ。久しく船中の苦に堪じ。くありし。今此處よりつきて船中の苦を忌んで年若く成て四十計に見ゆる由の給ひし。此川を四十川と云。云。此時管公五十七歳なり。水鏡天神の宮司を松岳山梅教寺觀音院と号す。開山を頼還と云。長政公の時此僧を置て住職とし給。了て那珂郡荒平山。小田部民部少輔分居城の趾。又鷲岳。大鶴式部分居城の跡あり。天正の比の人なり。早良郡。件引出あり。

○住吉神社

延喜式。那珂郡住吉神社三座並名神大とあり。住吉八須美乃

叡と訓べし。御名義ハ。摂津國住吉よきなり。摂津國風土記

者昔息長足比賣天皇世住吉大神現出而巡行天下。竟可住國時到於沼名掠之長岡之前。乃謂斯實可住之國。遂讚稱之。

云。真住吉國。乃是定神社。今俗畧之。直稱須美乃。叡とあり。さるを和名抄。攝津國住吉。須美乃とあり。後ハ諸國とも。通例。スミヨシ。さて書紀一書。此文のつぎ。委との。唱ふる事なり。さして書紀一書。此文のつぎ。委引出るを考ふべし。さて日本紀私記。此神。荒魂者。猶在筑紫。但和魂。獨在墨江耳。案神功皇后紀。云元年三月。皇后親為神主。於是審神者曰。今不答。而更後有言乎。乃對曰。於日向國。橋。小門之水底。所居。而水菘稚之出。居神名表筒。男中筒。男底筒。男神之有也。時得神語。隨教而祭之。然則此神本在筑前。小戸。即神功皇后初遷居於攝津墨江耳。とあり。さるを在筑前。小戸。とあるハ。誤なり。初より日向國。よせ。る。ガ。神功皇后の御時。顯り。給ひ。て。御功を。ま。し。給へ。る。よ。依。て。初。て。筑前。も。祭。給へ。る。なり。さて。師。説。子。神。功。皇。后。紀。子。定。神。田。と。あ。る。ハ。住。吉。神。の。御。田。よ。て。住。吉。社。旧。地。ハ。迹。鷲。岡。辺。なる。仲。村。よ。在。て。今。も。荒。人。神。續。紀。十。二。卷。よ。天。平。九。年。四。月。乙。巳。遣。使。社。と。て。あ。り。と。あ。り。續。紀。十。二。卷。よ。天。平。九。年。四。月。乙。巳。遣。使。於。云。云。筑。紫。住。吉。八。幡。二。社。及。香。推。宮。奉。幣。以。告。新。羅。无。礼。之。狀。字。佐。宮。記。よ。此。時。の。勅。使。三。代。實。錄。二。卷。よ。貞。觀。元。年。正。月。を。信。定。朝。臣。と。記。せ。り。



廿七日奉授筑前國死位住吉神從五位下。元經記□卷子。寬  
仁元年九月廿日微雨依可被定一代一度奉幣早且退出風  
聞右中辨於攝政御前書定書云云。十月二日云云。西海道筑  
宗像住吉筑後高良守佐香香已上卅八所被奉紫綾蓋四角在  
椎肥後阿蘇石清水姬宮金銅鈴  
平文野劔一腰入赤漆赤漆御弓一張箭四筋平文鉾一本在  
身五寸鏡一面在平文平文麻桶一口平文線柱一本奉除伊  
勢兩所並宇佐香椎等之外者皆被奉御幣一棒各緒五尺綿  
以薦中右記卅七卷子。元永二年四月廿三日今日早參伏座間  
頭之辨下云筑前往住吉社可有遷宮也件日時可勘下云云則  
仰下件者七月三日若八日奏覽之後先下左中弁了。台記□

卷子。治承三年五月三日庚申。權中納言忠親卿著仗座被行  
流人事云云筑前國住吉神社神官三人佐伯昌助伊豆同昌  
東鑑一卷。治承四年七月廿三日。有佐伯昌助者是筑前國  
住吉社神官也。去年五月三日配流伊豆國。先是同祀官昌守  
治承二年正月三日配當國云云。而彼昌助弟住吉小大夫昌  
長初參武衛。又永江藏人大中臣賴隆同初參。是大神宮祠官。  
後胤也云云。此兩人奉為源家兼日顯陰德之上各募神職之  
間為被仰御祈禱事令聽門下祗候給云云。八月十六日丙申  
為明日合戰無為被始行御祈禱住吉小大夫昌長奉仕天曹  
地府祭武衛自取御鏡授昌長給云云。十七日丁酉今日三島



神事也。群參之輩云云。又被副住吉，小大夫昌長。著腰於軍士是依致御祈禱也。同書十三卷。建久四年四月十一日住吉神主昌助參鎌倉御留守以女房申云。去月依旧院御周閑可被召返之由被下官符是。天治承三年五月三日所被配流伊豆國也。日來雖未為赦身潛仕將軍家云云。當宮文書。寄進筑前國一宮豐前國河崎庄地頭右今度之義兵遂本望祈天下之安寧家門繁昌所寄進如件。建武二年三月八日源朝臣判。又下筑前國住吉神主政忠可令早領知社務職再料免土豐前國虫生別府方地頭職事。右任永久四年三月十三日元亨二年三月十六日同廿九日下文等可令領掌之狀如件以下。

建武四年十二月十七日源朝臣判。又筑前國一宮住吉御寄附地豐前國赤庄事。任去正月十八日御寄進狀可被沙汰時下地於當神主政忠之狀依仰執達如件。貞和七年二月廿八日太宰筑後守殿散位判。又住吉社上下神官諸司供僧等給分内質券沽却之地事。依當宮再與與行之成敗在之。然者造營之可有執沙汰之。又造畢者可被還補下地本主之。兼亦神領沽却事自今已後堅被停止。畢若有御法族者云賣人云買人共以被處罪科之旨可被相觸社恩之輩之由候也。仍執達如件。文安二年十月十九日當宮大宮司殿座主御坊江尻新尤衛門殿盛成判。秀家判。盛政判。宗祇筑紫紀行。此比為古



給ふ住吉の御社に参見まは荒垣のめぐり遙りて連なる松の木立神さびしう。樓門なるを破きて社壇も全からび。いづれといへを此十年あまりの乱故と語るもかなし。社中を巡り見きを大木の松井垣して故ありと見ゆるあり。問へを此松木ハ御社に傾きて造営の障と成りける。行末も危りれを切ぬべしとふ勸進の僧の定めける。二三日の間よすこしづ。起直りて直り成ぬ。夫より此井垣なるとハ志るるより答ふ。其年ハ永亨十一年といへ。今年四十二ヶ年なり。其松を伐んと云し勸進僧ハ凡公華と申きと委く語るも有難く。道の正直の願いよく頼りて。

神垣の松を頼む言のちも直なる道に立や直る也

此社、松社の障となれを伐除むとせしよ一夜の内よ又管立直りし事あり。是も如の宗祇の時の松なるべし。

宮、住吉の松の海邊などハさる事なれど。眼よ近き風景ハ

いうもも増るべくぞ侍る。社頭邊をど神さび面毛き事ハ

又住吉よ並ぶハ侍がよくなむなどあり。さて住吉社祭祀

記畧よ。正月七日鬼平祭。人を擲て鬼と号て是を追討。終よハ寛永の初めより其詞ハ絶へし。

れども彼石柱な不残りて社前右方よあり。二月七日御田植祭。三月三日潮日祭。

同日神輿至大築紫。福岡北あり。於藥院村浮殿宮一夜御泊座云

云。八月四日新嘗祭。九月十三日垣例大祭。自十二日神輿有

渡御于博多吉祥社十三日於博多馬場有流鏑馬與行。其日



還御。伶人奏樂供奉。其道筋有橋。是名音樂橋。又号管絃橋。十一月七日步射祭。此日於社前功德池行放生會。此外小祀多有而祠官百五十人餘行。歲々時々祭礼。乱世之後神社頽破。祠官多離散。祭礼仪多断絶云云。まゝ傳説。天文比。神官佐伯宗能同秦正道社の衰へぬるを歎きて共々領主よりへぬりしかど。其さくなくして過ぬといふさるを近き比よいぬりて領主より散在せる神官の古名をぬりねて宮崎氏本姓佐伯塩田氏を社務として。修学料二十五石宛を給へり。

○宮崎宮

延喜式。那珂郡八幡大菩薩宮。崎宮名神あり。印本に名落せり。式名神祭條にハ幡神社とあり。八幡大菩薩宮。崎宮ハ也。波多能陀伊慕佐知波古邪伎乃美也と訓べし。ハ幡大菩薩の名義ハ豊ふべし。宮崎の事ハ那珂郡下巻にふべし。さて諸神根元抄上巻に。延喜廿一年六月廿一日大菩薩御託宣。吾穗波宮柱三悪有之。欲移住宮崎松原其故。昔天下國土乎鎮護始時戒定惠之。宮宿置志松原奈利乃号宮崎末世古敵新羅禍害。突物曾吾戒定惠。宮者置礼留宮崎松原仁。建立新宮。可降伏新羅敵國降伏之字乎。書付天吾座下。置天其於石居柏柱乎立天宮殿乎。造向彼新羅天自然降伏消除志奈牟件新宮。以延長元年佛經遷御已



畢御由来記。大帶姫花御子八幡土此朝仁昔渡給天占淨地。天御在所土定給志時大帶姫波占香椎天杉表逆仁殖  
乃重土志給阿須賀杉是也八幡大菩薩波占宮崎且戒定惠  
帶乃宮表埋且其上尔奎松表送仁殖給宮崎松是也其故尔大  
事帶姫波杉表御在所土定女八幡波松表所居土定女給布此  
加事人不知土御託宣延喜二十一年六月一日宮崎神託自我  
明加宇佐宮德波郡大分宮波我本宮也私曰大分我本宮者欽  
喜明天皇御宇御示現之前御靈行之時也鎮西要畧一卷子延  
崎喜廿一年太宰大貳藤原真村奉勅建八幡大神宮於筑前宮  
ハ崎ともあり今あり延喜廿一年と云事のは彼見えぬ  
宮ハ延暦元年などを誤るもてもあるべし延喜式子宮崎  
論宮とあれをそれより遙く古くあり宮崎子ありし事ハ  
の論なきをや猿樂の謡子宮崎といふ曲ありそれ子延喜帝  
給の御時壬生忠峯此御社子詣ある子神功皇后のありり  
を給ひし事朝野群載三卷匡房卿宮崎記子宮崎宮在西海道筑前國  
造を造り  
那珂郡蓋八幡大菩薩之別宮也傳聞埋戒定惠之三箇故謂  
之宮崎其處之為體也北臨巨海而向絶域為防異國之来四

寇垂跡此地潮汐包常滿宮中坤艮卅余里乾巽七八許里敢  
無他木只青松而已長短次序敢不參差造化之功也年中恒  
例佛事有司存焉二月騎射八月放生會以之為重事靈驗威  
神言語同斷非紙筆之所及康和二年有三綵幡上白御殿乘  
虛澠之以即劍於此朝論其聖化誰不受賜其神功皇后為討  
新羅幸於此道長降其國每年進八十艘調庸舟三韓入貢百  
濟來朝仲哀天皇即是大菩薩之孝廟也稱之三所尋其内驗  
昔現於行教和尚衣上非畫非書字弥陀三尊之像然則本國  
之宗廟旧記子太宰少二真村朝臣石清水八幡宮子して廻  
新宮廊造進すべき由立願ありけり子神託有て曰宮崎  
子新宮を造て御殿を乾むけ柱子柏を用ふべし子末世  
子至て異國より我國を窺ふ事ありむ我其敵を防くべし



此故子敵國降伏の四字を書て我座下の礎面子置くべし  
と宜ふ子依て眞村朝臣やがて其趣を奏聞する子則勅許  
あり其詞子云託宣之旨為御來冠加之外賓通攝之境也  
其宮殿殊可盡美麗是子依て神殿を造らせ給ひて敵國降  
伏の四字を切々せ給ひて宮柱の下子ちりせ給ひしなり  
又四方の廻廊ハ太宰大貳有國筑紫子降る時波風らげし  
くして舟すでよくつがへらんとちりる子宮崎宮子祈  
て此難を遁きしめ給る廻廊造りて奉らんとすうしけ  
る子やがて波風しづまりて事故なく筑紫子つきて彼宮  
子詣りめぐりし子つこの海の面も静りてありく子安  
き世とハ志らずやと神詠有しかむ大貳おそれ尊てや  
がて廻廊を造奉りしなりとあり敵國降伏の四字ハ小字  
なるをひろめて大字子造りな古事談子前對馬守義親康  
して今樓門の額子かけあり

和五年十二月二十八日依宮崎宮訃配流隱岐國百練抄六  
卷子保延六年六月廿日諸卿定申太宰帥頭賴卿訃申去五  
月九國所々大衆神人燒拂宰府已下屋舎數十家事此中大

山香推宮崎為張本東鑑七卷子文治三年八月三日筑前國  
宮崎宮宮司親重被行賞當國那珂西郷糟屋西郷等拜領之  
云云平氏在世之時依抽彼祈禱日來聊雖有御氣色所詮於  
神宮等事者一向可被優恕之由被思召定云云三長記子宮  
崎宮件建久七年十一月九日第二御體顛倒可奉直否官外記  
申右府被申云被直之條不可異儀強不可擇日次只以閑寶  
殿之次可奉直也東鑑二十三卷子建保五年九月廿九日京  
都飛脚參著申云去廿一日山門衆後頂戴日吉祇園北野等  
神輿入洛奉振開院殿陣頭仍遣北面衆被防禦之又住京健  
児光貞基清能直廣綱等依勅定馳參宮門相支之處加藤兵



衛尉光資

光貞男、後号加藤新左衛門尉

切落八王子駕輿丁男腕之間、令汚

穢神輿仍奉振弃、歸參是石清水別當法印宗清執務鎮西宮

崎宮之間、天台末寺大山寺、神人船頭長光安為宮崎宮留主

相摸寺主行遍、光子息尤近將監光助等被殺害、仍衆徒蜂起、

勤勞狀訴申之間、行遍光助雖被禁獄、沒收宮崎為山門、領并

可被配流宗清法印之由、訴申之所奉勅、神輿也、八幡愚童記

云、文永十一年十一月廿日、蒙古人日本子襲來、舟より降

て馬に乗て筑前、今津百道原赤坂口迄、乱入て、松原内子陣

を取、日本軍敗て、水城子楯籠むとて引退く、宮崎宮子を留

主を初て僧俗、社官等堅め、りかど軍兵等落失ある上

ハとて三所、神體を朱漆、唐櫃に移參せて、宮を出奉る、俄、事

なれを神輿よぶに乗奉らず、御供子を留主、尤衛門景親同

景康圖書允定秀已下、社官等御供仕奉て、宇美宮へと急ぐ、

彼所よも皆早く落失て一人も無り、山、上、極樂寺へ

ぞ入奉る、其後異賊退て還幸有しとあり、

歷代皇記云、文永十一年十月廿日

宮崎社焼亡とあるも、此時焼くは、あるべし、文永年中

忌誓が作りし海陸の吟子、宮崎社ひと、せの乱子社内荒

廢言語同断の事なり、いつく神前とある、不ど子あや

しの民家の志つゝひあるあり、此御内子正しく三所和光

の御座あり、御車のか、しける、さ、文書子鎮西宮崎宮

淡をおと、しき云云とも見えあり、

神領之事、重社中訴状、則神領如此子細見状、依國擾乱時、分

年々放生會事、令退轉云云、甲山軍務違乱一同、可被令社家



肝務次社領住人佐渡入道宮内三河入道可肖社令違乱社  
領内候事實云大不可然嚴密可為沙汰状依仰執達如件永  
和元年九月十一日今川伊豫入道殿武藏守判此件引出自  
海東諸國記筑前州宮崎津寄住臣藤原孫右  
衛門尉安直八幡神留主殿管下筑前州宮崎津寄住藤原兵  
衛次郎直吉信重兄子八幡神留主殿管下居宮崎津留主職  
家ハ近  
古ハ絶ぬりしを文化初子領主命  
子依て留主職家再ひおられり宗祇筑紫紀行宮崎子御  
殿大なる事世子越え志りも官道遠かりて玉を磨け足末  
社あるハ半なり侍見御殿の廻り渚子出るまで大木丸  
右子高くして地ハ砂明りなり御社正乾方ハ乾一て志加島

子向へり云云此浦宿ハ松樂寺と云則當社神宮寺なりや  
かて神主處至て對面也先御神事を尋侍る子中神功皇  
后尤寶滿皇后御妹なり右大菩薩子おろしり由云へり  
名處方角抄子宮崎の在所ハ南北へ遠し社壇ハ西向なり  
未申子いかき有之とありさて皇后御妹とあるハ宇佐宮  
古縁起子見えぬる玉依姫子して豊比咩とも申る宇佐男  
山鶴岡等を初め其外諸國の八幡宮子祭る姫神と彼皇  
后の御妹子なり文書子當國那珂郡宮崎八幡宮御社領那珂郡  
西郷百八拾町地之事從大内凌雲院殿御代雖為半濟為武  
運長久子孫繁昌所願成就皆令満足号新寄進奉還補者也  
仍執達如件永祿二年三月廿五日拜進宮崎八幡宮筑紫下  
野守惟門那珂郡内大宮司領五拾七町一段地之事先年以



坪付御注進無異儀候聊御社領不可有略落者也仍執達如  
件永禄二年九月十八日大官司秦弘重殿高橋左衛門大夫  
鑑種判師説子宮崎宮の大官司田村氏ハ武内大臣の子羽  
田矢代宿祿の後子て波多朝臣なり本ハ宗像七戸  
の大官司とて宗像社社子仕へりしガ中古宮崎宮の神官  
となれる由宗像の縁起も見えり唐舟の俗謡子宮崎  
殿とりふも此人の祖あり故も今  
も宮崎管領とかくなりとあり幽齋筑紫紀行子朝なき  
の程子宮崎よ渡りて見る子松をくくと續きて八幡宮ハ北  
子向ひて立ちあり云云宮崎ハ幡の内関白殿のおまし子成  
て各参上ましよ云云正記子筑前國宮崎宮領高千石配分  
之事一三百石御造宮料分一三石正月元朔御供料一四石  
五斗同日御酒迎一壹石正月十一日御斧立一三石  
正月十日

二月十日御誕生會連歌一拾貳石正月十四日御本地講一貳  
拾壹石月別御供一貳拾五石八月十五日放生會一七石五  
斗御道具仕替料一九石六斗御幣料一貳百石座主坊五智  
輪院法印一七拾貳石三斗五升大官司秦朝臣管領一貳拾  
八石貳斗五升勸進坊一貳拾四石七斗壹升總官留主職平  
朝臣一貳拾四石貳斗五升赤幡坊一拾石弥勤寺一拾四石  
六斗五升一御灯坊一拾五石貳斗二御灯坊一拾四石五升  
蓮城坊一拾四石四斗貳升架賢坊一拾三石五斗貳升一衆  
坊一拾壹石五斗六升智禪坊一貳拾三石四斗權大官司大  
神朝臣一貳拾貳石三斗八升執行安倍朝臣一九石貳斗三



升權大官司安部朝臣一四石九斗九升同藤原朝臣同仲原朝臣一五石六斗六升祝太夫一六石六升四臺坊一六石貳斗壹升定禪坊一五石五斗九升學頭坊一貳石八斗九升四ヶ所戸次朝臣一壹石九斗壹升別當安倍朝臣一七石七斗八升一番坊一六石貳斗七升二番坊一六石貳斗三升三番坊一貳石金藏坊一六石壹斗七升學所座三人一三石貳斗五升伶人座三人一三石九斗御油座三人一四石三斗飾座三人一六石壹斗五升御炊座六人一壹石貳斗一升小官司安倍朝臣一九石六升權小官司十四人一九斗神別當一九斗新勾當一三石九斗七升總大工中一壹石七斗四升總鍛

治一貳石六斗四升工匠座右御造管差燈明御供無懈怠以勤役被仰神慮者弥社中繁昌可目出者也文祿元年十二月廿一日五智輪院大官司殿御一社中山口玄馬頭宗長判又管崎八幡宮社任御朱印旨於糟屋郡管崎村五百石全奉拜進候仍而如件慶長六年三月十一日管崎座主黑田甲斐守長政判又高一高貳百貳拾壹石八斗七合御造管御祭祀料一斗二升六合壹夕赤幡坊一同拾五石四斗七升田臺坊一同拾四石八斗七升五合勸進坊一同拾壹石壹斗壹升智禪坊一同八石壹斗三升二御燈坊一同七石八斗貳升一御燈坊一同七石五斗六升蓮城坊一同六石九斗貳升五合一乘坊一四石八斗五升外學頭坊一拾壹石壹斗九升大官司秦氏一八石三斗五合總官留主田村氏一八石五升執行安倍氏一石七斗三升推大官司大神氏一三石三斗九升權大官司仲村氏一三石貳升四ヶ所戸簾氏一貳石四斗九升祝大夫



大神氏一七石貳斗志外一番預法師一四石五斗九升二番  
 預法師一四石貳斗六升五合三番預法師一貳石貳斗貳升  
 饒座柴田氏一壹石六斗三升同座有馬氏一壹石三斗同座  
 清水氏一三石貳斗四升一三石貳斗四升御油座奧氏一貳  
 石六斗七升伶人座柴田氏一壹石五斗五升七合同座西田  
 氏一壹石五斗五升七合同座同氏一壹石貳斗七升權小宮  
 司十一人一壹石九斗壹升九合内匠柴田氏一四石五斗九  
 升御炊座六人一壹石七斗八升神別當戶次氏一四斗八升  
 貳合鐘撞都合五百拾  
 八石三六五夕也  
 管崎宮祭祀記畧子正月三日玉取祭  
 号管崎宮市始管崎馬出西村民行之の管崎町夷社より木玉  
 の徑尺余なるを取出  
 して油を塗て本社の拜殿で行く道すがら是を取む  
 と争ふ是を取得ふる村ハ其年五穀能く熟すと云又那珂  
 郡東堅粕村子玉田と云田字あり管崎宮神  
 領ありし時の玉取祭の料なりしといふ五月騎射祭云  
 云此祭事管崎記にも見えて重祭なりども今ハあえり八月十五日放生會十三日  
 曉神輿三基奉移于松原頭宮十四日夕還御十五日朝執行

流鏑馬其後執行猿樂五番其後又與行相撲云云此祭年久  
 及断絶之處延寶三年座主坊盛範再興云云昔ハ博多夷町  
 子御幸有しと  
 云元禄十四年祀官等神幸再興事を國主子乞て頭宮を社  
 松原内子造て宝永二年秋より再び是を行ふといふ社  
 記畧子管崎宮者文永二年二月十一日弘安三年九月廿四  
 日兩度雖及燒亡云云造營之又永亨六年六月二日燒亡此  
 時為亂世之間奉移假殿空經三十余年其後文正元年大貳  
 多々良朝臣持世造營神殿及諸堂末社文明三年四月廿三  
 日本社有御遷宮  
 天文年中大内義隆又雖造營今本社未及行遷宮式義隆卒  
 去天正十五年豊臣關白九州征伐歸陣之節以此社被為本  
 陣被執筑紫成敗逗留及二十日上洛之後被行此社遷宮之



式○前後皇本書に式部卿於下諸事類  
を記す要領を難し今持宮社與慶長御儀  
を名に撰取て皇式部卿其書を録す 國主小早川中納言隆景卿寄附社領

其後慶長五年國主黒田長政朝臣又寄附神領造備諸堂末

社等給云云。又宝物目錄子。歌國降伏文字三十七枚。延喜帝

妙法院宮短冊七枚。天正十五年六月十八日大閣秀吉公寄

進和歌首大内義隆卿寄進。太刀一振。高力左近寄進。御劔

一振。陰陽太刀二振。刀一腰。以上國主忠之朝臣寄進。八幡

宮額。近衛左大臣基熙公筆。八幡神筆。御名号一軸。舟曳久之

亟寄進。太刀一振。同人寄進。弥陀名号。弘法筆。當社座盛範寄

云云。古文書目錄子。貞應元年一通。建長元年二通。正和

元年一通。建武三年一通。觀應二年一通。同三年一通。康暦二

年一通。永和二年一通。至德三年一通。寶徳二年一通。文明十

二年一通。此外寛永己未。文書多有之。末社記子。南

方若宮殿。禮。若宮。若姫。宇。南方仲哀殿。明神。高良明神。志賀明神。

北方赤幡殿。誦訪明神。北方愛宕殿。愛宕權現。高野明神。市杵

神。本地堂。聖徳太子。阿弥。若八幡社。夷社。荒神社。燈籠堂。辨財

天。護摩堂。神馬屋。など見えあり。八月大祭子。又隔年子。神

幸あり。十四日夕諸人群集する事三都大祭子異なり。す。花

を以て第一の社地今ハ糟屋郡子つけり。社ハ四方子廻廊

有て其内子あり。神殿ハ三社一棟子て階三所子あり。朱

塗子て檜皮葺なり。前子拜殿あり。其前子樓門あり。其前

子石。大鳥居あり。其前則官道なり。是より海まで數町あり。

社辺數十町の平沙實子魚雙の風景あり。

○特多  
櫛田社

東海一漚集子。櫛田宮鐘銘并序昔在大日靈貴會素戔嗚鳥千



後文祿三年七月國主小早川中納言隆景卿寄附社領。

其後慶長五年國主黑田長政朝臣又寄附神領。造備諸堂末

社等給云云。又宝物目錄子。歌國降伏。文字三十七枚。延喜帝

妙法院宮。短冊七枚。天正十五年六月十八日大閣秀吉公。寄

進。和歌。首大内義隆卿寄進。太刀一振。高力元近寄進。御劔

一振。陰陽。太刀二振。刀一腰。以上國主忠之朝臣寄進。八幡

宮。額。近衛。元大臣基熙公。筆。八幡神筆。御名号一軸。舟曳。久之

亟寄進。太刀一振。同人寄進。弥陀。名号。弘法。筆。當社座盛範。寄

云云。まゝ。古文書目錄子。貞應元年一通。建長元年二通。正和

元年一通。建武三年一通。觀應二年一通。同三年一通。康曆二

年一通。永和二年一通。至德三年一通。寶德二年一通。文明十

年一通。天文六年中十六通。永祿二年二通。文祿

二年一通。此外寛永己未。文書多有之。

末社記。南

方若宮殿。若宮。若姫。宇

禮。姫。吳。姫。宇

南方仲哀殿。仲哀。天皇。伊勢。兩神。春日

明神。高良。明神。志。賀。明神。

北方赤幡殿。誦訪。明神。北方。愛宕殿。愛宕。推現。高野。明神。市杵

住吉。明神。北方。愛宕殿。島。明神。大祖。權現。警。同。明

神。本地堂。聖德太子。阿弥

陀。兩。室。童子。若八幡社。夷社。荒神社。燈籠堂。辨財

天護摩堂。神馬屋。など見えあり。八月大祭。子又隔年子神

幸あり。十四日夕諸人群集する事三都大祭子異なり。す。花

を以て第一の社地今ハ糟屋郡子つけり。社ハ四方子廻廊

見とのとす。梯田社

有て其内子あり。神殿ハ三社一棟子て階三所子あり。朱

塗子て檜皮葺なり。前子拜殿あり。其前子樓門あり。其前

子石。大鳥居あり。其前則官道なり。是より海まで數町あり。

社辺數十町の平沙實子魚雙の風景あり。

東海一漚集子。梯田宮鐘銘并序昔在大日靈貴會素戔嗚子



高天原而請取所佩之十握劔呵之化生五女兒死皆為神其  
長曰某娘旧祀于伊勢國櫛田川旁然而其行宮總以櫛田宮  
稱焉惟在筑之博多者持統天王朱鳥年中之建立也距今六  
百五十餘歲也北條平氏之伯于關東遠江守平隨時居茲府  
總管西海道九品之時尤敬本宮百祭悉與繇是博多厚欽此  
神凡有所祈皆答如谷應聲既而祭禮如法祭器完具惟鐘未  
有以為缺也邑人淨願博己所用參積朱寸遂以元應元年秋  
七月鑄而成之適當朝廷命征夷大將軍足利源某為伐平氏  
自正中至建武凡一紀天下大亂宮亦累災其間異祥良多益  
神見其事於未萌而但人不預知也逮乎天下定于一朝廷以

博多邑賜大友式部亟源某為賞戰功也邑人以其化政悅之  
若時雨降也茲之明年重建本宮高廣壯麗過於旧制見聞隨  
喜声喧街衢於此淨願亦見義勇為再役鳧氏以曆應三年四  
月廿七日其功畢矣以今者視昔者則其音韻矣以昔者視今  
者則其音羸矣鏗々之響上于霄可以感飲神靈而坐致彤響  
也後二年謁予以銘銘曰樂之興也器以鐘之不窳不樛感且  
容之堅其質兮虛斂中兮扣之必應谷神空兮声出于外神而  
通之建仁寺僧仲岩  
四月の作なり文書子冷泉津櫛田宮祝大夫下地職事  
先日令申候之處被成御分別被打渡之由候尤可然候兼又  
彼御神領之内金丸名之事御燈坊被申事同前被遂披露之



由兩申次一通為御披見進之候為御公領被相拘様御入菟  
專一候御判之儀御雜務時分可被仰出旨候恐々謹言十二  
月五日。奴留湯長門守殿。小田部民部入道殿。大津留和泉守  
殿。田吹左衛門殿。岐部掃部助殿。夏瀬民部少輔殿。森五郎兵  
衛殿。胡摩津留左京亮殿。平井中務丞殿。臼杵安房守鑑續判  
とあり。永享年中真堂家文書。宮崎宮櫛田宮住吉宮御油  
買云云ともあり。委くハ御笠郡新萱関件より引出づ  
し。櫛田ハ久志陀と訓べし。和名抄。伊勢國飯高郡  
櫛田。久之多とあり。御名義  
ハ。次子云べし。さて和漢三才圖會八十卷。筑前國櫛田社  
在那珂郡博多。祭神一座大若子命。天慶五年初祭之後合祭  
天照大神。素盞鳴尊。以為三座。写本九州軍記二卷。永享四年五月下

旬云云原田。兵五六頭用事有て博多津子逗留。同六月十  
五日同津櫛田宮繁礼あり。三社神輿沖濱へ御幸之後山の  
如く十二艘の作物をうくこ上子人救やうの物を居て  
是を舁捧持行く。前伐且て無りし事なれば。見物貴賤幾千  
万と云數を知らず。少貳が士三原入道が士。數輩上下百余人  
出津。彼祭を見る。原田が士とも津内子留る事なれば。市子  
出て是を見る。いり志りけん。小二原田が士等鬭諍を  
仕出し。雙方二百余人太刀を抜て切合程。見物の男女逃  
さよふ有様。蜘蛛子を散すが如し。數刻切合程。原田追々  
馳合て。小二三原が士雜兵五六十人切殺を。残者共八方へ



逃散、これを原田勢ハ其足よて高祖城ヨ帰けり。原田方ヨ  
も死人廿余人、手負五十人ヨ及べ。件、三社ト申ハ、中殿櫛  
稲田姫素盞鳴尊の妃也。左殿ハ天照大神宮、祇園大明神是  
素盞鳴尊也。云云天慶四年藤原純友誅伐初度、追討使小野  
好古朝臣博多津而合戦あり。其功を遂難きに依て東長密  
寺、法印阿闍梨尊田ト心を合て、山城國祇園大明神を勧請  
す。櫛田宮ハ其己前云云天平宝字元年河内國櫛田を勧請  
す。故ヨ櫛田本社ト以テあり。河内ハ伊勢を誤きりと聞ゆ。式ヨ伊勢國多氣郡櫛田神社  
三重郡櫛田神社あり。肥前神崎郡、櫛田ヨ大若子、り考ふべし。九勅軍記ヨ、正慶二年肥  
後國住人菊池入道寂阿ハ、後醍醐天皇ヨ無二の御身方な

りしが、筑前國姪濱なる探題北条英時を討んとて、僅ヨ百  
五十騎を引率し、三月十三日宰府道を西ヨ向ひて姪濱へ  
と馳行く。さて櫛田社の前を打通る時、軍凶をや示され  
けむ。又築志打するをやとめ給ひけん。寂阿ガ馬一步も  
たずびら、ヨ寂阿大ヨ怒ていりある。神ヨてもおろせ戦  
場ヨ向ふ。その、乗打をとめ給ふやうやある。其儀ち  
を矢一筋まわすをべし。うけて見給へよとて、上さしのか  
ふる矢をぬき持て、神殿の扉ヨ二筋までぞ射付、ありける。  
かくて馬ハ事なく、さけるよさこそと打らうひてと  
ちりける。事静まると後博多住人奥民部之丞久吉と云者神



殿をひろきて見ぬるよかのかぶる矢をこまぬの口子  
ふくこりしこそふしぎなれ云云異本太平記よ人皇九  
十五代後醍醐天皇御代元弘三年菊地寂阿北條英時を責  
むとして博多よ向ひくるが簾のうも矢を抜て阿曾宮子奉  
るとる

武夫の簾の上矢一筋子思ふ心ハ神ぞ志るるむ  
一説よそ寂阿筑前櫛田宮を射る時の歌をして

そのふのやとけ心の一筋子思ひきるとハ神ハ志  
る大蛇ありて寂阿が矢よ阿りて死ありしよ見えぬ  
りさて太平記綱目参考とりふるとのよ寂阿がこの時よ

めりしうとてのせありそのふのうも夫のかぶる一  
筋子たひびきるとハ神ハ志るるやさて神社考よも櫛田  
宮と云をあげてこの故事をのちるれあり何国とリ小事  
ハ見えされども博多なる探題英時をうつし見ゆれむ  
らよの櫛田社ときこえあり志るるハ神社啓蒙のうとよ  
よそ肥前國神崎郡櫛田神社をのせてこなるハとよ  
見又三才回會も肥前なるをのせぬなる肥前志上巻  
神崎郡櫛田神社のうかりよいへることどもを考ふべし  
奥堂家傳來古文書よ宮崎宮櫛田宮住吉宮御油買被通候  
時苧萱關過錢事任先規之旨不可有煩候役人等江此分  
堅可申候恐々謹言永亨十年二月十六日奥堂弥次郎大夫  
殿河内山式部丞所秀書永亨十年ハ文化十二年也櫛田社  
記よ三月五日沖濱神幸夷社よあるきおろして志るる  
同月十三日還御夷社より本社よ還らせ六月十五日祇園



會。猿樂を行ふ。永享四年六月十五日此祭を  
始む。不此祭の事後に委くいふべし。十一月新嘗祭。

第一卯、日あり。此外年中祭多しといへども今ハ其祭式  
此祭今よあえす。

めぐることなり。その花山と云ハ京の祇園會の鉾のごとく  
なるとのなり。されども京の鉾よりふとく又人形なども

年ごとにつくりかへる。山のさまをうふる。そのなれを黄  
金をくなくしてハと、のろび。昔ハ此山の數十三なりし

と。今ハとしごとと六なり。六月の一日はかきろじめ  
て十五日までハとりのそくる事なり。十四日十五日の西

日ハ國中の人ハさるもいと。他國の人もあつまりそ  
のよきろひハ京の祇園尾張國津島の祇園もをさくお

と。貝原翁云博多櫛田社昔ハ南向りて。社前太宰府  
祭なり。

往來の道なりしと。近比御社の向を替て寅方を前にして  
改造。

社地ハ本の鳥居をも同方よめてあり。社地廣く神殿

拜殿能舞臺廻廊其外諸堂そちるれり。此社ハ古代の鐘一

尺七八寸あり。不窳不楸。且容之と云銘を志るせり。天正

五年豊後國大友家、家臣綾部玄蕃允と云者此鐘の古銘を

削去て、新子銘を成せり。神官數家あり。社務東長密寺大宮

司祝陸奥守次八尋氏、柳氏、山崎氏、天野氏、總之市等仕奉き

已。祝氏家系子筑紫御使、君の子孫とあり。

○警固神社

和漢三才圖會八十卷に、筑前國警固大明神、在那珂郡警固

村、今移同郡藥院村云云。社記畧に、警固神社其初在福崎山

上、福岡築城之時、移于下警固村山上、其後慶長十三年、予藥

院町、東小鳥、社合祭、大祭九月十九日、有神樂流、鑄馬、猿樂云



云とあり。此神を神功皇后の御船を警回しある神社僧ありと云説ハいとトきひがことなり。神  
又真言宗よりして中臺山遍照寺吉祥院と号す。警回村に在し。警回神社とも云。警回村ハ古ト博多館の警回を置給へりし處なり。その事委く警回所とあ處ト云べし。さて薬院村ハ古ト施薬院を置給へりし處なるべし。

○網敷天神社

神社啓蒙六卷ト。網敷天神。在筑前國博多。所祭神一座。里諺曰。昔菅家尤迂之日。先憇此地也。海濱無席。仍令座船網之上。所謂一夜白髮之天神是也とあり。此社ハ初沖濱との間の入海の側ト在し。慶長元年移して博多網敷町ト有て。方子向へり。祭ハ十一月廿五日トあり。神官ハ真言宗成就

院と云。水鏡天神と云ハ。福岡東橋口トあり。社家傳説ト菅公太宰府へ尤遷の時御船袖。湊ト著て。舟より上らせ給ひ。御身の衰へを歎き給ひ。一説ト。後世社を建て水鏡天神と云。又容見。天神とも云。一説ト。菅公御容を此川よりつさせ給ひて。船中の苦ト堪が。かりし。今此處ト著て。船中の苦トを忘れ。年ト若やぎて。四十トかり。見ゆる。なりとの。ぬまひし。由トて。今此川ト四十四川ト。此時菅公ハ五十七歳。好里。官司。坊ト松岳山梅教寺。觀音院ト号す。長政公の時頼還。

○兼天寺

元亨釈書七卷ト。叙辨田字。田尔。肥州有榮尊者。与尔跨海游宋地。尊三歳。婦領水上山寺。及尔還。改禅林。請尔闲山自居。板頭。仁治三年秋。謝國明於博多東偏。創兼天寺。与尔領之。佛鑑聞新寺事書。承天寺及諸堂額諸牌等大字。寄之。佛鑑書法妙



絶故有此送宰府有智山寺者西州之大講肆也嫉尔之禅化  
欲毀承天新寺執事者聞于朝寛元元年勅賜承天崇福二刹  
為宮寺而息有智山之濫寇尔乃高揭佛鑑所書勅賜大字相管  
公傳衣記子仁治二年之夏聖一國師因尔辞徑山佛鑑禪師  
而飯再著筑前博多其年十一月十八日昧爽管神挿梅花一  
枝於袖裡來見國師而求法衣乃呈和歌曰唐衣登米底幾多  
野能神曾土波袖仁持多留梅仁底毛志礼云云とあり世に  
渡唐天神像として異服して梅を持ある像多しある人の説  
は是ハ林和清の像なるをかくハいひ習ハせある物なり  
と云本朝高僧傳廿五卷子叙田心字鐵牛久侍聖一國師飲  
厭道味云云心後出世筑之承天同書廿四卷子叙智侃字直  
翁云云嘉元末筑之承天寺虛席衆請侃住持嗣香供聖一同  
卷子叙慶謙号潜溪云云正和九年夏出世筑之承天文書子

承天寺住持職事任先例可被執務之状如件永正十二年十  
一月廿八日元甫西堂権大納言花押義植筑前國承天  
寺領同國那珂郡野間高宮平宮平原三ヶ所同郡藥王院入  
法寺并肥前國神崎郡内百町地等事任去享祿二年十二月  
六日天文三年三月十一日同十四年九月十三日龍福寺殿  
證判之旨可有寺務之状如件天文廿一年九月十八日承天  
寺周防々判大内義長まゝ筑前國那珂郡三宅村之内貳百石之  
事今以檢地上令寄附訖全可寺納候也文祿四十二年朔承  
天寺朱印秀吉公秀吉など見えあり禪宗万松山承天寺ハ筑前國  
主秀秋の時百石を減せられて今僅に百石寺産残きなり又



塔頭四十二院有しと云を是も今ハ十四區のい残り今

四區と云ハ常樂院四徳院宝聚院天与菴祥勝院本城寺海藏菴退耕院天徳院壽徳院釣寂菴元亨菴禅光寺乳峯寺海藏菴ハ虎閑和尚基の菴なり又永天寺十境と云事もあり此寺乱世の兵火ハなり

て佛堂三门等も焼亡せしを佛堂ハ其後ニ造スりしかと

三门礎のい残りハされども佛鑑禅師額ハ今ニ傳ハれり額の本書ハ聖福寺ニあり又此寺を造スりし謝国明が墓ハ辻堂を出て此寺の東宰府ニゆくハちの如クなりハありハ博多町ニあり

○聖福寺

元亨釈書二卷釈書西傳ニ建久六年創聖福寺干筑之博多言上書

博多百堂地者宋人令建立堂舎之旧跡也而件精舎破壊之後再不修營之間偏為空地雖送星霜既又依為佛地類不居

往仍建立伽藍欲備大菩薩御法樂以本家御祈禱并建立堂舎安置丈六釈迦弥勒弥陀之三尊鎮護國家且為除凶徒之障碍為備而後之證跡殊被御下可加守護之由者佛法與隆之御願何事如之哉者賜御下文欲遂造營之功而已建久六年六月十日

本朝高僧傳廿六卷釈竺源字東海姓藤紀州人云云以公選領筑之聖福同書廿九卷子聖福寺宗規云人の事も見えあり群書

類從聖福寺佛殿記子西海道筑前博多津之安國山聖福寺  
□今光明菴法師閑化之地也師自日本未入中國抵浙東天台乃是宋淳熙間也歲大旱請師禱雨身癸千光上燭天雨大澍世因以称之事在天童菴虚菴和尚記茲不書師歸大啓宋乘叔始茲山則元久改元初年也至今無隱禅師已三十三代禅師亦自祝髮浮海至中国凡三十有三年大得其道以歸名



震朝墊。即奉旨主席茲寺東廡之暇。顧瞻咨諏。慨歲月之推遷。念前人之靈蹟。覩殿宇之無成。遂奪志於作真。於是升堂。擡法。沐乃鼓。集衆曰。茲寺千光法師所建。寔西海法窟。日東名利。廢而不治。其如法師。覓王何衆咸悚悅。唯禪師命是從。赴功趨事。莫敢或後。詢諸同帑。則寺之歲入。緇素衆多。廩稍恒不給。非勸以有成也。乃榜于山門。而施者咸集。焉師嘗以春秋農隙。時遊覽山水。間達友富人。傾聚落。迎拜錢幣之獻材木之奉。舟銜騎踵。以先至為幸。至若不彰。其而樂施者。恒有之。禪師又以衣鉢之餘。悉助其費。亦若于。緡苟非導尊德重一出於大公。至正忠義之心。其能致此哉。為殿四楹。崇若于。亦疊石為基。覆以瓦甍。

戒以夾室。左右迴廊。輪奐翬飛。藻梳妍麗。中設三世佛像。塗金飾朱。五采鮮好。天光日華。連蕩。檻間鼓鐘相宣。梵唄相應。真若祇園勝地也。迨為九州冠。此今之所。叛而昔之所。弗及也。經始於正平十年月日。落成於正平二十有二年。於是寺之侍史洎寺之僧。以輝師之命。來徵予記。予適以避世。至其國。与禪師素相聞。今復相逢。過於萬里之外。義弗敢辭。切惟道無頭。晦時有污隆。時隆則道從而顯。時污則道從而晦。然又係天網。維其道者。為何如耳。嗟夫。中國自紛變以來。天下之郡縣及名山大川。佛氏之宮。百無一二存者。兵殘火燬。荒臺斷礎。相望於草莽之間。民之徒。又皆逃難解散。所存者不知其幾何人也。而佛氏



之道又茫乎而無所求矣予自秉桴至此聳東國之用兵亦已三十有餘年而佛氏之宮無一敢廢者戰者畊而自若也予謂三代之用兵法制之善亦莫能過之天何中國之倡過亂者若是其慘酷也抑天之未定歟天之使然矧乎禪師亦自中國歸祝釐演法大振宗風於東土之國上以發諸祖不傳之妙下以閑來學所悟之方以一心而覺一世之所迷合一世之覺以啓百世之所覺嘻斯道既晦於中國而大顯於東土道之所存也道之係乎人者不已重乎其於建是功立是業崇其堂構而有以大其觀瞻所以尊其道是不忘其拳本也豈惟因陋就簡視若傳舍漫不加省者其可同日語哉後之覽者能無感焉正平

二十三年春二月七日河南陸仁記并篆額書丹住持耆舊等立石仙巢稿下卷下扶桑最初禪窟安國山聖福禪寺山門欽奉大祖越征夷大將軍鈞命敦請前大願景轍禪師住持本寺為國閑堂演法祝讚皇圖万安者右以正法流通臨濟留真於安國方丈詞源廣大幻住贈偈於高嚴瀋王之曰宗師典刑耐稱後學標準以惟新命堂上景轍大禪師胸涵千古眼蓋九茹中峯禪林白眉規矩可則了菴行天素月光境共忘擊鼓鞠百里之雷剔灯聽十年之雨異代同稱東坡老人翰林公不孤有隣西走入滕王閣仰山作獅子吼濁世現烏跋曇為法忘軀從師學道溫公起洛蜀公起蜀賢才爭來武帝好美文帝好文聖



運益成謹疏今日日疏知事毘丘頭首比丘勤奮毘丘西堂比  
丘前建仁永恩扶桑最初禪窟安國聖福寺僧也などあり  
寺記畧し頼朝卿以百堂地賜千光國師依之造寺院弘禪法  
後鳥羽院自書扶桑最禪窟之六字下賜聖福寺當時寺地甚  
廣而諸堂僧坊並軒子院有三十八區境内今民家と成る處  
あり是も聖福寺の西門の跡あり今ハ昔も志うすと  
とも境内なる廣し子院十四區あり丹覺寺虚白菴節心院  
護聖院瑞應菴法喜菴慈菴幻住菴壽福  
菴宝珠院順心菴一枝菴禪居菴是なり其後乱世相續博多  
地度々懸兵火至秀吉公之時寺院聊復旧其後國主小早川  
隆景卿寄附寺産三百石被建立方丈今前  
堂也至秀秋卿被減百  
石慶長六年國主長政朝臣依秀秋卿例寄附二百石其後佛

殿三門鏤樓関山堂經藏等有建立今子院有十四區又有聖  
福寺十境者其一曰龍淵室関山堂也  
号護聖院其二曰聚星閣其三曰  
冷泉亭其四曰無染池在宝珠  
院内其五曰通津橋其六曰七里灘  
云博  
多濱其七曰十里松其八曰妙理祠鎮守  
社也其九曰金河云那  
珂川  
也其十曰鉄塔舍利  
堂るとあり聖福寺ハ博多町ありて  
西南方子向へり古ハ洛妙心寺派にして今ハ大徳寺派の  
禪寺なり境内甚廣し門子扶桑最初禪窟の額を掛あり後  
ハ比恵川下流を限とむ此寺の境内子寺中と号して歌舞  
伎をなして世を渡るとのあり九  
品念佛の  
位牌石塔あり隆景卿備  
餘流なり此寺隆景卿  
後三原子葬きり  
○妙徳寺



御判、宮崎今山妙德寺申條々一寺領在家田畠等万雜公事  
檢断以下事為御祈禱所之上者任傍例可停止之旨御下知  
於動時之留主肖御下知令違犯甚以不可然早守先下知旨  
固可停止新儀非法者也一金目河之事先年被懇望申被  
仰下上者更不可改變之儀如先寺家進退領掌不可有相違  
次田畠以下事可停止萬雜公事檢断新儀非法之旨同被  
仰下早任先御下知可被存知候但於有限之社役者無懈怠  
可致其沙汰云云一源藤三入道屋敷地料事先例不勤仕之  
由令申之間所證可辨申所見之旨去元亨元八月雖被尋下  
無音之上者任先御下知寺家可致其沙汰也右己前三ヶ條

守此旨留守更不可違犯之由重所被仰下也。正中二年五月  
廿日、宮崎宮公文所殿。□□又筑前宮崎今山妙德寺建立之  
次第、昔建久二年辛亥創刹也。千光國師素願也。雖為然如許  
棄指此地應永初中與閑山天性和尚防州產自釈迦以降大  
明國天童山如淨禪師之裔嫡日本越前永平禪寺道元和尚  
末葉五十九世之孫牟住妙德寺佛殿并方丈經營之矣。二弟  
夢幢佛殿方丈兩所造作也。鎮守社壇建立三弟以心禪師具  
福慧二嚴矣。六十一世之苗孫也。僧堂厨庫山門中與天性影  
室造營之。此鴻基者祠堂檀那肥州住人中村三河守万足百  
斛寄附之。每月念四日一衆水陸會諷經畢云云六十四世災



叟超禪師仲之以義大振天性佛法退念之懷遠人德競來十  
二時中方規四矩更無怠惰者也諸察之昔天文九年卯月十  
三日傳法六十六世比丘菴蔭慶彭記之とあり。妙徳寺ハ馬  
出町の内ニあり宮崎宮の [ ] 丁許ニあり本尊ハ [ ]  
[ ] として曹洞宗なり。是榮西宋より歸て初て住し處と云。  
又馬出村南ニ寺中町と云傳へる處あり。是榮西妙徳寺  
ニ在し時宋より從來ありし者の住めりし處なりといふ。

○藥王院

洪鐘銘云。大日本國西海路筑前堅糟村本堂藥王院再鑄洪  
鐘其銘云。天尊北辰地接東震皇圖永固佛日高輝粵供鐘再  
發声々塵清淨菓壺益添色々法是空於乎聞声而見色見色

而聞声諸佛及衆生世間相常住。大檀那武衛將軍沙弥道鎮

近江守平滿家勸進沙弥宗通。昔應永二十年癸巳四月十六

日敬白。長野氏云。此鐘ハ今川貞世入道探題として。此國子  
來りて掛ふるなるべし。此人探題ありし車ハ海

東諸國記ニ  
見えあり。とあり。筑陽記云。那珂郡東堅糟村藥王院東光

寺本尊藥師如來傳教大師 [ ] 當寺者真言宗洛陽仁和寺之

末院也。平城天皇大同元年草創也。中昔及乱世寺院荒廢佛

像破壞應永廿年武衛修補本尊及日光月光十二神將弁財

天金剛力士撞鐘等再與之。天文五年沙門道教諸堂修造。寛

永年中國主重眞堂院僧坊建立飛來権現寄附寺領二十石。

末院ニヶ寺也とあり。先師説云。東光院藥師ハ堅粕山藥王  
寺といふ。堅粕村の中ニあり。本尊藥



師ハ秘佛よして五十年ハ一度閑帳モ大同元年ハ建立せりト云薬王寺の傍東光院あり薬師堂を守る僧のすむ所なり同説ハ東光寺といふ昔東光寺といふ寺ありし故ハ子村の名とす元ハ那珂郡の内なり後ハ日ハ此ハ村の産砂神ハ吉備津宮なり此社のある不しりを東光寺といへを此所なりハち其遺跡あるべし此村ハ大日寺あり日なり尊大

○東長寺

文書ハ御料所ハ西寺ハ東長寺事諸勢在津之時者寄宿歴然候常住之時者於彼所々諸人寄宿停止事無聊可申可然候善導寺事者軍勢在津之時任法泉寺殿様御下知之旨寄宿停止候上者別而不及申定候恐々謹言八月十三日山鹿彈正忠殿與秀書判とあり寺記畧ハ博多南岳山東長密

寺者密宗之道場而管攝田社之神務云云延曆二十三年弘法大師渡唐之後大同元年歸朝到博多創造一寺所携来之独鉢杵及佛舍利一粒藏此寺号寺於東長密寺此寺初在海辺境内方三町子院有五區至元弘比羅兵火寺院悉焼失也此時寺僧以不動像及鯨鐘埋林中携大師像与独鉢道于志摩郡志登村其後經三年而建寺於此地云云其後又值度々之濫妨宝器類多被奪去今所傳之物弘法自作像又自西像又心經独鉢杵佛舍利是也傳言自古九國僧徒於此寺行灌頂云云國主忠之朝臣之時造管本堂護摩堂鐘樓大日堂等寄附寺産三百石云云とあり

東長寺初の地ハ今の  
吳服町、辺ありと云也。



博多  
善導寺

文書に當寺事為御祈願可被致宝祿長久国家恭平精誠之由天氣所候也仍執達如件十二月廿五日左少辨判善導固譽上人御房又太府宜太宰府廳官人等可早任廳宜筑前國冷泉津善導寺事右寺任太譽和尚申請之旨向後可為祈願所之状如件者在廳官人等宜承知宜行之以宜天文七年六月廿四日大貳多々良朝臣義隆卿也又當寺事補御祈願所御大慶候然上者祠堂物於利倍者不及德政并及時對當津中從前々被仰付候御要脚支配之時不可準地下仁之由候右兩条別紙奉書在之尤以珍重候恐々謹言天文七年戊戌年六

月廿五日善導寺侍者御中與秀判とあり於博多津前々御要脚被仰付候時善導寺事令支配之儀候今度被補御祈願所上者更不可準他下仁之条向後如斯之御用雖津中申觸候以聖福寺兼天寺并可被相陳之由被仰出候此等之趣對寺家可被申候之由候恐々謹言六月廿四日飯田石見守殿隆玄書判與景書判とあり光明山善導寺ハ博多寺町子あり淨土宗鎮西派なり傳説に康正年中武勅金沢廣譽上人筑後國善導寺再興の後博多より来て當寺を造営也文明九年ありかくて塔頭も十六坊有しと云を今ハ一坊あり文書佛像古画器物類甚多し



○大衆寺

早良郡飯盛文珠佛軫木銘文云云七月九日開眼供養導師博多大衆寺長老曉海信證上人云云康永元年七月廿五日記之畢求法沙門衆首了融記之とあり法皇山大衆寺ハ博多新川端町ニあり昔ハ律宗ニシテ西大寺ノ末寺ナリ亀山法皇ノ勅願所多ク依テ法皇山ト号スト云永禄比浄土宗ト成シを正保元年領主真言トシテ寺産百石を寄附志給ヘリ本尊ハ弘法大師自作ノ千手觀音ナリ博多七觀音ノ一ナリ

○称名寺

此寺什物水玉と云物あり經一寸三歩あり水晶にて世に類ひなき美玉ナリ

文書ニ就筑前博多津称名寺畑禄之儀彼覺阿可為再與之旨若豊州言上候處被成御分別子細以御書奉書被仰出候殊官内之儀兩門前已前之儘無相違御才覺肝要候由以連署被申候就夫諸御公事之儀御免之由被申出候以此旨田原彦三郎能々可被仰達候恐々謹言九月二日博多称名寺覺阿弥陀佛親速書判又就博多津称名寺畑禄之儀覺阿為之再與之由候条御分國中材木之事被得上意候然者當郡之儀右之旨不可有餘儀候恐々謹言大永八年戊子潤九月廿五日壽宝寺御近習御中親速書判壽宝寺ハ早良郡ニあり又博多津土居道場同官内兩門前東在家諸職人以下諸令役事任先



例被免除畢可被存其旨之由依仰執達如件。天文四年七月九日。杉彈正忠殿。越中守。下野守。三河守とあり。金波山称名寺ハ。博多寺町土井町ともいふあり。元應二年兼阿上人開基の寺なり。称阿名阿として父子有て施主とぬる。故に称名寺と云と云也。慶長比より塔頭六區有し由あるが。今ハいふがら絶あり。此寺ハ浄土宗遊行派より相州藤沢寺の末寺なり。筑前国中の時宗ハ皆此寺より付属す。

○妙樂寺

石城遺寶子。虚堂禪師四代。孫日本妙樂寺僧八十七歳宗琦得先祖遺墨年深若有日本僧来付此字寄日本妙樂寺余了

願心也。宗琦石隱書云云。又二首并序雙桂惟肖。妙樂寺乃冷泉石城遺地也。所謂吞碧在寺。坤隅元明本朝哲匠頭詠滿壁。大蔭伯傳聞歆艷命能畫者。因之得瑤席竹菴禪師一篇以系其上。且屬余續貂焉。憶先師昔膺官差往蒞聖福。予方弱歲中侍以行于時。無方應台踞妙樂室。与先師有舊。進寺消日其間。借榻寓于樓下。殆二旬餘也。登覽之美。寔所目擊。予已七袞加二歲月多矣。樓亦崩壞不修。無復仿佛觀。因弗能無感。則託瑤席韻。未有以榮耀亦幸也。况大蔭好事盛意。曷得而拒焉。倍和二章以還云云とあり。石城山妙樂寺ハ。禪宗なり。初ハ博多北濱今其所を妙樂寺前町といふなり。あり。今ハ聖福寺と承天寺



との間子在て。子向へり。日華人塔録子。妙樂寺潮音閣吞  
碧樓等事見えあり。此寺天文七火災子焼多りと云。古ハ末  
寺も二十七院有しと云。今已づり子三區あり。今寺産三十  
石六斗五升二合あり。吞碧樓事ハ別件  
子引出て云へり。或説子博多妙樂寺  
ハ。禪宗なり。吞碧樓記大明靈隱禪寺住持來復是を作る供  
武年中の事なり。天文七年博多火災子依て此寺も焼失せ  
り。慶長初今の所子移り。閑山月堂和尚ハ宗規禪師又知足  
老人と号り。筑前宗像郡大保の人子志て。大應國師弟子な  
り。正和五年妙樂寺閑山とちる。正平辛酉七十七歳子志て  
寂り。子院二十七區あり。今僅子三區あり。即宗菴望雲菴又

宗福寺末寺永壽院も此寺内子あり。

○龍宮寺

宗祇筑紫紀行子。博多と云子著きぬ。宿子ハ龍宮寺と云る  
浄土門の寺なり。此所を司る山鹿壹岐守とかくの事子ざ  
と常の如し奥深き方子方丈餘の處あり。うちの飾あるべ  
きやうよして庭の草木見處あり萩の下葉切れくちる打  
ちり吳竹の葉風あしく吹て。獨ぬへき心地もせぬ旅  
枕なり。此院主道子すける人よて。心さしを盡さむと見え  
ゆるもゆるどけなし。明ぬ水バ此處のさまを見侍る子。前  
子入海遙しして志賀島を見渡しよて。沖よて大船多く掛



唐土人きやのりけむと見ゆ。尤ハそれとるき山ども朝霧子重なり。右ハ宮崎の松原遠くつゝあり。佛閣僧房敷も志らば。人民の上下門を並へ軒を争ひて其塚四方も廣し云云。宿元の院主一折のあやしく侍きを又の日。

秋ふけぬまののろの沖はゆせ

云云。見えぬら。此寺初ハ浮御堂云しといふ。今ハ冷泉山龍宮寺と号す。谷阿上人此寺を閑基せりと云。谷阿ハ仁治二年ハ遷化しある人なり。寺ハ東長寺の前ハあり。浄土

宗鎮西流なり。此寺を龍宮寺と改めし。元四年四月十四日博多海中ハ人魚を得あり。此由を奏聞せし。かむ。勅使冷某下向有て暫く此寺ハ住居し給ふ。其時ト者安部大富と云。この是を筮して。國家長久

の瑞なりと云。龍宮より来ぬる物なりと云。意めて。龍宮寺と負せ。冷泉某の逗留有し。夏なれを冷泉山とハ負せぬ。なりといへ。龍宮寺。正觀音ハ慈覺大師作なり。

○松樂寺

宗祇筑紫記行宮宮崎。此浦のやどりハ松樂寺といふ。則當社の神宮寺なりとあり。今ハ禪宗濟家法幢山勝樂寺として神宮寺ハあり。比。宮崎町ハあり。應安年中華林禪師の閑基なり。寺領も十四町餘有て繁榮の地なりしと云。昔の繪圖と多々良顯孝寺の末寺なりしを。彼寺絶て後聖福寺の末寺とあり。華林禪師ハ顯孝寺第二世の住職なり。

○廣嚴精舎



蕉堅稿子。蔡金牛送和山上人歸閩西詩序和山上人將還閩西之友社同志之士雖欲挽留而不可也。則石賦唐詩一章以寓其志焉。厥声悲慨清壯有陽關之声河梁之思焉。盖有鬱乎内發乎外者。若鐘鼓之考不知其声之揚也。全牛祭上人錄而字之烏絲欄而徵余叙于編首。噫余其可以無言乎。丁巳春余自南國回首謁筓崎之廣嚴精舍其主人大疑老人以余剽劫之餘謀生無聊而七年之素館余正寢自處偏室以憇奔走而全餘喘焉。其德曷可忘也。上人乃大疑之令姪也。故余之於上人之別也。鬱乎内而發乎外者。其敢後乎。諸子耶。始者余觀上人之在叔父之傍也。言寡而恭行端而靜。勇於講學急於進業。

而乃瀟洒而出塵之標望之。翠竹碧梧鸞鵠停峙可喜也。私心以宏大之器而期之矣。明年上人從叔父赴京余亦同舟而行吟於夜雨於蓬底賦明月於柁樓泝乎雲濤之渺泐凌鮫鱓之飛涎以壯一時之懷快哉。于后相共隸名龜山焉。無幾大疑表率多衆矣。上人亦登顯職矣。而余亦接武大矣。則彙征之慶有在焉。而余之所以期於上人者且驗矣。今歸也。余其可以無言乎。凡士之業成位登顯揚親族光耀間里者。昔人比之衣錦之榮焉。矧乎不離叔父之傍則必有鏃礪括羽之道不虛矣。往哉。但秉下三宿先哲有戒上人其勉哉。無若大山之麓止而不得升也。其唯川之不已乎。以祝以規とあり。廣嚴精舍ハ今詳



おろす。

○院使寺

玉林菟下卷子。夫海西子名隅あり。背振山是ぬり云云。抑元明の聖代和銅二の年とくや。三昧發明の上人湛譽を召給る事有き。則詔よ應じて花浴の月子奉上り。帝闕の星を仰て効驗威光を輝も。時子勅使の至し麓寺院使寺と号せらる忝なく覚ゆる云云とあり。院使寺ハ那珂郡別所村、枝村子あり。今ハ井尻と云。土人語傳子和銅比太子御惱祈の爲子院宜有て背振、湛譽上人を召さる事あり。上人詔よ應して都子到る其時院使の宿うれぬ寺なれを。院使寺

と号する由云云。五ヶ山の内外別所村とりか。湛譽上人の木像といふ物あり。其堂のうしろ子湛譽上人の墓と云物もあり。

○明光寺

豊鐘善鳴録三卷子。無襍禪師諱融純。越後刈人云云。住肥前慈廣寺。應永中筑前檀越建明光寺于博多津。聘師為開山祖とあり。大寶山明光寺ハ博多寺町子あり。中比退轉して小菴のこ残まうり。寛永五年領主の助成子依て時の住僧生雄宗湛和尚此寺を再興せり。宗湛ハ筑前の産なり。寺産五十石今子傳ハれ也。安国寺金龍寺明光寺ハ國中曹洞宗の長子正忠正直の位牌と安置し給へり。



○崇福寺

仙巢稿下卷

龍光院殿碑銘云云以紫府崇福禪寺徙管陽松間招請大德禪寺雲英大和尚開堂演法聳動衆聽古人云王者德出山陵則慶雲出雲英乃是居慶雲也とあり崇福寺初ハ御笠郡宰府村横岳此寺事委く御笠郡件云ふを考ふべし洛北大德寺春屋國師此寺再興事を請ひ依て國主長政朝臣那珂郡管崎松原此寺再興事を請ひ依て國主長政備へて菩提所として寺産三百一石九斗七升一合貳夕を寄附し給へ也此外五十石ハ関山堂よつく寺ハ官道の西傍在て東南

方子向り境內廣く塔中區あり

○五智輪院

文祿元年寄附狀一貳百石座主坊五智輪院法印とあり五智輪院ハ眞言宗よして大真山五智輪院と号し本尊弥勒佛なり故よ弥勒寺と云と云也藥師觀音も左右よあり住持ハ座主坊なり寺ハ八幡の左よあり八幡宮座主坊なり也

○管崎弥勒寺

文祿元年寄附狀一拾石弥勒寺又慶長六年寄附狀一百六石七斗七合四勺座主坊弥勒寺とあり今ハ是を五智







ある處なきを小寺にてハありさりしなるへし。ちよよく考ふべし。

○施薬院

群書類從二十五卷松浦廟宮本縁起。真吉備朝臣任太宰都督既歴八箇年之間建立施薬院并始起種々佛事等云云とあり。那珂郡薬院村あり。是施薬院を置きし跡なりと云。ちよよく考ふべし。

○海藏寺

虚空藏菩薩體中銘。大日本國筑前宮崎卧龍山海藏禪寺虚空藏菩薩住持比丘 慈元等保祐十方檀那等信施且那祐金大姉

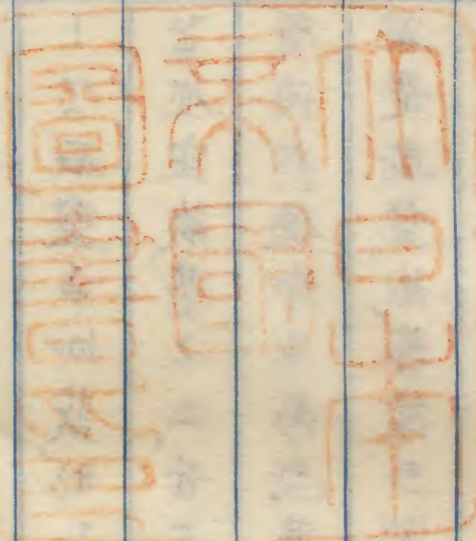
庚辰女永享七年乙卯二月十一日癸丑日関日勧進比丘沙門玄秀判とあり。師説。三笠郡本城南の高岸下竹林中にして石壁。伽藍形を彫付あり。其前。聊の平地あり。此處を虚空藏臺と云。昔虚空藏堂有しと云。其時の佛像今ハ宰府の六度寺あり。其躰中。銘。云云とあり。常足按じ。是虚空藏菩薩ハ元より宮崎の。して三笠郡。方。はあらざるべし。海藏寺。事。ハ。い。ま。ご。考。へ。ば。

○飛来権現社

宮崎宮。日記。平井殿。尤東堅糟。馬出。金平。辻堅糟。西堅糟。凡百八十町之地。主神也とあり。師説。飛来権現。神體。ハ。古。衣。



冠しある木像ありありあり。金平村、田字、平井田と云あり。  
昔の神田なるべし。



太宰管内志

筑前之七

